

# インドネシアにおける家庭教育と非行少年の関連

チニンタアプリナ\*・田中理絵

The Relationship between Family Education and Juvenile Delinquency in Indonesia

Cininta APRINA, TANAKA Rie

(Received September 30, 2016)

## 1. 問題の設定

現在、インドネシアは道徳の荒廃という大きな問題に直面している。若者たちは、麻薬・向精神薬の乱用、ポルノや暴力に晒されている。なかでも、麻薬・向精神薬の乱用件数は高く、国立麻薬機関のデータによると、2008年だけでも19,791件もの乱用が報告されている（Badan Narkotika Indonesia, 2009）。さらに懸念されているのは、インターネット上の「sex」のキーワード検索でインドネシアが上位5位であることだ（beritasatu.com, 2012年12月28日）。既に、インドネシアにはポルノに関する規制があるとはいえ、この規制の運用は未だ十分とはいえない状況にある。子どもたちは、ポルノ出版物の海賊版やアダルト漫画、あるいは制限付きのアダルトビデオのサイトを携帯電話やインターネットカフェで容易に閲覧することができる。また、インドネシアの子どもたちの多くはメディアを通して暴力シーンに囲まれているが、実際に身の周りでも暴力にさらされている子どもたちも少なくない。このような状況で、今後ますます子どもたちを、ポルノ、麻薬・向精神薬の乱用、暴力などいかなる悪影響からも保護する必要があるといえよう。

子どもたちを保護する方法のひとつは、家庭で子どもたちを教育し、健全な人格と価値観を身につけさせることである。最も効果的に、健全な価値観を子どもの内面に取り込ませることができるのは乳幼児期なので、子どもたちは家庭教育を通して自然な形で環境・物事の健全さ／不健全さを自分自身で選別・判断することができるようになり、やがて、それが自分を守ることに繋がる。このようにして、子どもたちをこれからの人生で直面する困難な状況に対して、準備をさせ、立ち向かわせるわけである。

家庭教育はすべての教育の出発点であり、子どもが基本的な生活習慣・生活能力、豊かな情操、他人に対する思いやりや善悪の判断などの基本的倫理観、自立心や自制心、社会的なマナーなどを習得するうえで重要な役割を果たすものである。しかしながら、日本と同様、インドネシアにおいても、近年は、都市化、核家族化、地域における地縁的なつながりの希薄化など、家庭や家族を取り巻く社会状況の変化のなかで「家庭の教育力の低下」が指摘されている。教育力の低下が直接子どもたちを問題状況に追い込むといった証拠はないものの、少年非行の背景・原因の1つとして考慮する必要はあるだろう。

これまで、世界各国で少年非行の原因について多くの実証・理論研究が積み重ねられてきた。田島（1999）によれば、家族は単に子どもを養育するだけでなく、社会の構成員として必要

---

\* 山口大学大学院

とされる知識や技能の基礎を、しつけや教育といった働きかけにより子どものなかに形成させる役割を担うという。したがって、一次的社会化の場である家庭が機能しない場合は、子どもは健全な発達を阻害されると考えられる。そこで、家庭と非行とは関連があると一般にも考えられてきたわけである。しかし、未だインドネシアにおいては、家庭でのしつけの実態と少年非行との関連については実証研究に乏しいため、本研究では中高生とその保護者を対象とした調査を実施し、分析を行うことを目的とした。

## 2. 調査方法

本研究では、東ジャワ県（マラン市とスラバヤ市）とジャカルタ市内の中学校・高校を無作為抽出法で6校選出し（中学校3校、高校3校）、各学校に在籍する生徒・保護者に質問紙調査を行った。調査期間は2015年3月～4月であり、1,085組の質問票を回収した。回収率は82.2%で、各学校の配布数と回収数は以下のとおりである。

学校別・調査票回収率

学校名	生徒・保護者配布（組）	回収数（組）	回収率（%）
A中学校	110	93	84.5
B中学校	110	90	81.8
C中学校	110	107	97.3
D高校	110	85	77.3
E高校	110	80	72.7
F高校	110	89（生徒） 86（保護者）	80.9 78.2
合計	1,320（票）	1,085（票）	82.2（%）

## 3. アンケート調査の結果と分析

### （1）中学生と高校生の非行について

エリクソンの発達段階<sup>1</sup>では、思春期は、幼児期から学童期の初期に獲得した精神発達を基盤に、さらに心理・社会的に成熟して社会に出ていくための発達を遂げる重要な時期である（羽岡、2009）。思春期というのは11～18歳（中高生）頃まで続く、第二次性徴をきっかけとしてはじまる心身ともに不安定な時期を指す。思春期は不安定な時期なので、この時に非行に走るリスクが高いと考えられている。

最初に、中学生と高校生別に、彼／彼女の生活のなかにどの程度の非行因子がみられるのかについて見ておくこととしよう。質問項目は「周りに非行に走る子がいますか」「（自分が）非

<sup>1</sup> エリクソン (Erikson, E. H.) は、人生を「乳児期」、「幼児前期（早期幼児期）」、「遊戯期（幼児後期）」、「児童期（学童期）」、「青年期」、「前成人期」、「成人期」、「老年期」という8つの段階に分けた。青年期では性欲がふたたび表面化する。これに基づいて自己概念が新しく現れてくる。生理学的変化と社会的な葛藤とによる混乱の時期である。新しい自我同一性 (ego identity) —— 自分がどんな人間かということ —— を確立することが課題となり、これに失敗すると役割混乱が起こって同一性拡散 (identity diffusion) という病理が生ずる。人格が統一されず、社会へのコミットメントができない状態に陥ってしまう。青年期は新たに出会う世界とかかわりを結ぼうとする。青年は同一性 (identity) の確立を目指して試行錯誤しながら、やがて自分の生き方、価値観、人生観、職業を決定し、自分自身を社会の中に位置づけていく。

表1 周囲に非行に走る子の有無（中学生の学年別）（％）

	周りに非行に走る子がいますか		合計
	はい	いいえ	
中1年	86.6	13.4	100.0 (97)
中2年	76.8	23.2	100.0 (95)
中3年	90.8	9.2	100.0 (98)
合計	84.8	15.2	100.0 (290)

$$\chi^2=7.674、df=2、p=.022$$

表2 非行に走った経験の有無（中学生の学年別）（％）

	非行に走った経験はありますか		合計
	はい	いいえ	
中1年	47.4	52.6	100.0 (97)
中2年	21.1	78.9	100.0 (95)
中3年	59.2	40.8	100.0 (98)
合計	42.8	57.2	100.0 (290)

$$\chi^2=29.95、df=2、p=.000$$

表3 現在も非行行為をしている割合（中学生の学年別）（％）

	まだ非行行為をしていますか		合計
	はい	いいえ	
中1年	60.9	39.1	100.0 (46)
中2年	35.0	65.5	100.0 (20)
中3年	31.4	68.6	100.0 (51)
合計	43.6	56.4	100.0 (117)

$$\chi^2=9.282、df=2、p=.010$$

行に走った経験の有無」「まだ非行行為を継続しているか」である。中学生の調査結果は表1～表3であり、高校生は表4～表6に示した。「周りに非行に走る子がいますか」の項目では「はい」と答えた中学生が84.8%、高校生が85.3%であり（表1、表4）、中学生と高校生の違いはあまりなく、中学生でも高校生でも周囲に非行に走っている友人がいることが分かる。自分自身が「非行に走った経験」については、中学1年生では47.4%、中学2年生で21.1%、中学3年生が59.2%であった（表2）。また「まだ非行行為をしている」と答えた中学生は、1年生で60.9%、2年生が35.0%、3年生が31.4%という結果であった（表3）。今回の調査では、中学1年生の段階で「非行に走った経験」と「まだ非行行動をしている」と答えた生徒の割合が高いことから、小学生の段階から既に非行の問題が起こっていることが予測される。

表4 周囲に非行に走る子の有無（高校生の学年別）（％）

	周りに非行に走る子がいますか		合計
	はい	いいえ	
高1年	84.6	15.4	100.0 (91)
高2年	84.5	15.5	100.0 (71)
高3年	86.7	13.3	100.0 (90)
合計	85.3	14.7	100.0 (252)

n.s.

表5 非行に走った経験の有無（高校生の学年別）（％）

	非行に走った経験はありますか		合計
	はい	いいえ	
高1年	37.4	62.6	100.0 (91)
高2年	33.3	66.7	100.0 (72)
高3年	53.3	46.7	100.0 (90)
合計	41.9	58.1	100.0 (253)

 $\chi^2=7.773$ 、df=2、p=.021

表6 現在も非行行為をしている割合（高校生の学年別）（％）

	まだ非行行為をしていますか		合計
	はい	いいえ	
高1年	42.9	57.1	100.0 (35)
高2年	28.0	72.0	100.0 (25)
高3年	56.0	44.0	100.0 (50)
合計	45.5	54.5	100.0 (110)

n.s.

一方、高校生で「まだ非行行為をしている」と答えた生徒は、1年生は42.9%であり、2年生が28.0%、3年生が56.0%であった（表6）。これらのデータを見ると、子どもは成長とともに自然と非行行動を脱するとは言えない。特に、高校3年生における非行の継続群が高いのは、高校3年生が他の学年よりも勉強・進路のプレッシャーが高く、そのストレス発散のために非行に走っているとも考えられる。

次に、中高生別に非行の種類を見てみよう。図1に示しているように、中学生でも高校生でも、非行の種類については喫煙最も多い（中学生70.1%、高校生64.8%）。インドネシアでは子どもの喫煙が急増しており、社会問題化している。タバコを購入する際に年齢制限を設けていないので、子どもでも容易に売店で買うことができる。

(%)

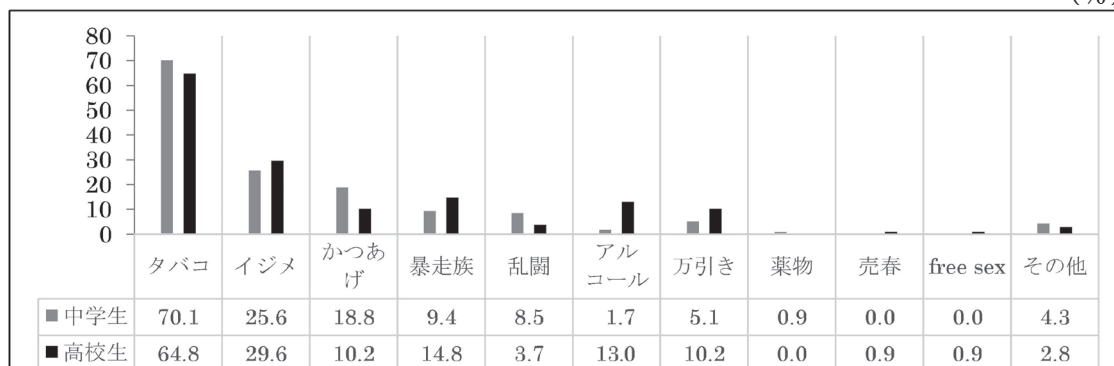


図1 中・高校生と非行の種類

こうした環境・環境上の緩さに加えて、成人の喫煙も多いことから、親がタバコを吸う姿を見て子どもが真似をすることが、タバコを吸うきっかけとなっているとも考えられる。「暴走族の経験がある生徒」は高校生で14.8%であったが、中学生では10%未満と低い。この他に「アルコール飲酒」は高校生で13.0%、中学生が1.7%、「万引き」は高校生で10.2%、中学生で5.1%、「イジメ」は高校生で29.6%、中学生で25.6%であり、いずれにおいても高校生が中学生より高い結果となっている。一方、中学生に多いのは「タバコ」(70.1%)、「かつあげ」(18.8%)、「乱闘」(8.5%)である。

(2) 中学生・高校生による家庭教育と非行少年のつながりについて

さてここからは、中高生と親とのコミュニケーション状況および親の厳しさとの関連について見ていくこととしよう。「あなたは父親とよく話し合いますか」の質問では、中学生で「はい」と答えたのは1年生で51.5%、2年生が64.1%、3年生が71.9%であった。中学生は、学年が上がるほど父親と話しをする割合が増える傾向が見られる。

表7 中・高校生における父・母親と話し合いの有無の割合 (%)

		あなたは父親とよく話し合いますか		合計	あなたは母親とよく話し合いますか		合計
		はい	いいえ		はい	いいえ	
中学生	1年	51.5	48.5	100.0 (97)	90.7	9.3	100.0 (97)
	2年	64.1	35.9	100.0 (92)	89.5	10.5	100.0 (95)
	3年	71.9	28.1	100.0 (96)	77.6	22.4	100.0 (98)
高校生	1年	67.1	32.9	100.0 (82)	92.1	7.9	100.0 (89)
	2年	71.0	29.0	100.0 (69)	87.5	12.5	100.0 (72)
	3年	70.9	29.1	100.0 (86)	86.4	13.6	100.0 (88)

中学生p<.05、高校生n.s

同様に「あなたは母親とよく話し合いますか」について「はい」と答えたのは、中学1年生で90.7%、2年生が89.5%、3年生が77.6%であった。父親とは異なり、インドネシアの中学生は、学年が上がるにつれて母親と話しをする割合が減少する傾向が見られる。学年が上がるにつれ父親と話す割合が減少する日本の状況とは異なる、インドネシアの特徴であると言えるだろう。ただし、すべての学年において、中学生は父親よりも母親との会話が多いのは日本と同様である。

その一方で、高校生では「あなたは父親とよく話し合いますか」の項目に対して、「はい」と答えたのは高校1年生で67.1%、2年生が71.0%、3年生が70.9%というように、学年が上がるにしたがって若干増加する傾向が見られる。また「あなたは母親とよく話し合いますか」の項目では、「はい」と答えたのは高校1年生で92.1%、2年生が87.5%、3年生は86.4%であった。高校生は学年が上がるにつれ母親と会話をする生徒が若干減るものの、中学生と同様、父親より母親とよく話をしていることが分かった。

次に、中学生と高校生の親子間のコミュニケーション状況と非行とのつながりについて考察していく。生徒の「親との話し合いの程度」と「非行経験の有無」について、「父親・母親とよく話し合いますか」の回答（はい／いいえ）と「非行の経験有」をクロス分析した結果を示したものが、表8と表9である。この結果、中学生では父親／母親とも有意差がみられるものの、高校生では見られなかった。表8から、非行に走った経験がある中学生は1年と2年で、父親とあまり話しておらず、それぞれ54.3%と61.1%である。しかし、3年生になると、非行に走った経験がある中学生は70.2%が父親とよく話しをする。また、非行に走った経験がある中学生では、1年生から3年生まで父親と比べて母親とはよく話しているものの、学年が上がるにつれて、母親と話しをする割合は減る傾向が見られた。

表8 「非行経験有」 × 「親と話し合いの有無」 (中学生の学年別) (%)

	あなたは父親とよく話し合いますか		合計	あなたは母親とよく話し合いますか		合計
	はい	いいえ		はい	いいえ	
中1年	45.7	54.3	100.0 (46)	89.1	10.9	100.0 (46)
中2年	38.9	61.1	100.0 (18)	70.0	30.0	100.0 (20)
中3年	70.2	29.8	100.0 (57)	65.5	34.5	100.0 (58)

p<.05

p<.05

表9 「非行経験有」 × 「親と話し合いの有無」 (高校生の学年別) (%)

	あなたは父親とよく話し合いますか		合計	あなたは母親と話し合いますか		合計
	はい	いいえ		はい	いいえ	
高1年	57.6	42.4	100.0 (33)	84.8	15.4	100.0 (33)
高2年	69.6	30.4	100.0 (23)	87.5	12.0	100.0 (24)
高3年	63.0	37.0	100.0 (46)	79.2	20.8	100.0 (48)

n.s

n.s

続いて、中学生・高校生が感じる親の厳しさについて見てみよう。親の厳しさの調査結果は表10から表13に示した。中学生の調査では、学年が上がるにしたがって、父親は「とても厳しい」「どちらかといえば厳しい」という答えが増加しており、有意差が見られた(表10)。母親の厳しさに関しては、中学2年生で「とても厳しい」と「どちらかといえば厳しい」という回答の割合が増加するものの、中学3年生になるとその割合はおさえられる(表11)。中学1年生(13歳)はまだ小学生の延長であり、子どもとみなされ、中学3年生(15歳)になると今度は高校受験を前に自意識やコンプレックスと向き合う時間的余裕がなくなる。しかし中学2年生はその中間であり、時間的余裕があり、自意識が強くなったり、「自分は何でも出来る」といった万能感を持ったり、あるいは他人には気にならないようなことが大きなコンプレックスとなる時期であることから、非行に走るリスクが高くなる。そのため、子どもが非行に走らないようにと、他の学年に比べて中学2年生は、親は子どもに対して厳しく接するのかもしれない。

一方、高校生への調査では、父親の厳しさ(「とても厳しい」+「どちらかといえば厳しい」)に関する意識は、高校1年生で61.9%、2年生で63.2%、3年生では63.1%と違いがみられず、母親についても、父親と同様に、高校1年生で61.1%、2年生で65.3%、3年生では51.7%という結果で有意差は見られなかった。高校生は学年による有意差はみられないものの、ただし、中学生に比べて高校生の方が両親とも厳しくしつけを行っていると感じられている。

表10 父親の厳しさ(中学生の学年別) (%)

	父親は厳しいですか					合計
	とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	あまり厳し くない	全く厳しく ない	分からない	
中1年	14.4	32.0	45.4	5.2	3.1	100.0 ( 97)
中2年	7.6	46.7	28.3	17.4	0.0	100.0 ( 92)
中3年	10.6	46.8	28.7	10.6	3.2	100.0 ( 94)
合 計	11.0	41.7	34.3	11.0	2.1	100.0 (283)

$$\chi^2=20.030, df=8, p=.010$$

表11 母親の厳しさ(中学生の学年別) (%)

	母親は厳しいですか					合計
	とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	あまり厳し くない	全く厳しく ない	分からない	
中1年	4.1	34.0	53.6	6.2	2.1	100.0 ( 97)
中2年	9.5	38.9	23.2	27.4	1.1	100.0 ( 95)
中3年	5.1	26.5	53.1	13.3	2.0	100.0 ( 98)
合 計	6.2	33.1	43.4	15.5	1.7	100.0 (290)

$$\chi^2=32.911, df=8, p=.000$$

表12 父親の厳しさ(高校生の学年別) (%)

	父親は厳しいですか					合計
	とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	あまり厳し くない	全く厳しく ない	分からない	
高1年	19.0	42.9	25.0	9.5	3.6	100.0 ( 84)
高2年	17.6	45.6	27.9	5.9	2.9	100.0 ( 68)
高3年	10.7	52.4	28.6	7.1	1.2	100.0 ( 84)
合計	15.7	47.0	27.1	7.6	2.5	100.0 (236)

n.s.

表13 母親の厳しさ(高校生の学年別) (%)

	母親は厳しいですか					合計
	とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	あまり厳し くない	全く厳しく ない	分からない	
高1年	14.4	46.7	32.2	6.7	0.0	100.0 ( 90)
高2年	18.1	47.2	22.2	11.1	1.4	100.0 ( 72)
高3年	12.4	39.3	37.1	10.1	1.1	100.0 ( 89)
合計	14.7	44.2	31.1	9.2	0.8	100.0 (251)

n.s

最後に、中学生・高校生による親のしつけ態度と非行とのつながりについてみておこう。本調査では、「親のしつけの厳しさ」と「非行経験の有無」をクロス分析したが、その結果、有意差が見られたのは、中学生だけであった(表14、表15)。この理由として、高校生まで成長すると、親と子どもとの力関係が逆転することで、家庭教育の効果が弱まることが背景に考えられる。

表14 「非行経験の有無」×「父親の厳しさ」(中学生) (%)

		父親は厳しいですか					合計
		とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	あまり厳し くない	全く厳しく ない	分からない	
非 行 経 験	ある	13.4	37.8	35.3	10.1	3.4	100.0 (119)
	ない	9.1	44.5	33.5	11.6	1.2	100.0 (164)

p&lt;.05



表15 「非行経験の有無」 × 「母親の厳しさ」 (中学生) (%)

		母親は厳しいですか					合計
		とても厳しい	どちらかといえば厳しい	あまり厳しくない	全く厳しくない	分からない	
非 行 経 験	あ る	7.3	19.4	54.8	16.1	2.4	100.0 (124)
	な い	5.4	43.4	34.9	15.1	1.2	100.0 (166)

p&lt;.05

ところで、中学生の非行経験率が高いのは、父親のしつけが「とても厳しい」群と母親のしつけは「あまり厳しくない」と回答した群であった。反対に、非行経験率が低いのは両親とも「どちらかといえば厳しい」であったことから、子どもに対して過度に厳しくしてもいけないが、親に監督されている意識を子どもが感じる事が非行の予防になる可能性がうかがえるだろう。

#### 4. まとめと今後の課題

以上のように、中学生と高校生の非行と家庭教育との関連についてアンケート分析を行った結果、今回の調査では、①インドネシアの中高生は、周囲に非行に走る友人・知り合いが多く、②中学1年生で「非行に走った経験」あるいは「いまもまだ非行行為をしている」と答えた生徒が多いことから、小学生の段階から非行問題が起こる／起きていることが予測された。また、③中学生よりも高校生の方が非行の種類・率ともに多くなる(図1)。そして、④インドネシアにおいては、中学生の非行経験者は学年が上がるほど父親との会話は増えるが、母親との会話は減る傾向がみられ、高校生においてはこうした傾向は見られず(表8, 表9)、⑤親のしつけの厳しさと非行経験については中学生でのみ有意差が見られ、高校生では有意差は見られない。これは、高校生まで成長すると、子どもも体つき・腕力・体力面で親を超えることで親の権力が相対的に弱まり、その結果、家庭教育の効果・影響が及ばなくなる可能性が考えられた。

今回は、中高生とその保護者を対象として調査を実施したものの、親子ペアでデータ収集ができなかったため、家庭の経済力・子どもの学力・親のしつけ態度が、子どもの非行とどのような関係をみせるのかを調べる調査ができなかった。今後、これら項目を含めた親子ペアでの調査を実施し、より詳細な分析を進める予定である。

#### <引用・参考文献>

- Ardaneshwari, Jane. 2013. Potret Dilema Perempuan Bekerja dalam Media Perempuan Indonesia. *Jurnal Perempuan, Karir dan Rumah Tangga*, Vol. 18 No. 76
- Kadarusmadi. 1996. *Upaya Orangtua dalam Menata Situasi Pendidikan dalam Keluarga*. Disertasi. Bandung: PPS IKIP Bandung
- Kartini, Kartono. 1988. *Psikologi Remaja*. Bandung : PT.Rosda Karya
- 田島信元 (1999) 「親子関係」 中島義明・安藤清志・生子安増・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田祐司 (編) 『心理学事典』 有斐閣、p.87

## <URL・新聞>

- ・『Kompas新聞』2014年6月1日「Indonesia Surga bagi Perusahaan Rokok」
- ・「報酬と罰の効果2：叱り方、罰や体罰の問題点と効果・ちょっと複雑な話」<http://www.n-seiryu.ac.jp/~usui/yaruki/batu2.html>（2014年2月23日）
- ・「子どもたちの未来をはぐくむ 家庭教育－家庭教育支援の取組について－」[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/02/29/1312147\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/02/29/1312147_01.pdf)（2015年10月9日）
- ・「Polda Metro: Kenakalan Remaja Meningkatkan Pesat, Perkosaan Menurun」<http://www.beritasatu.com/megapolitan/89874-polda-metro-kenakalan-remaja-meningkat-pesat-perkosaan-menurun.html>（2015年1月29日）
- ・「Teori Pola Asuh Menurut Para Ahli」  
<http://www.bimbingan.org/teori-pola-asuh-menurut-para-ahli.htm>（2015年11月11日）